

こうの ごんげん ししや こうのやま
神於の権現さまの使者（神於山）

むかしむかし、ずーっと昔の話や。

神於山のふもとの村の貧しい百姓家に、「しの」とい
う美しい娘がいた。

「しのを嫁さんにしたい。」と村の若いもんが、次つぎ
に言ってきたんやけど、しのお父とお母は、その
たんびにことわった。「しのを、もっともったいいとこ
ろに嫁にやりたい。」と願ってな、その日がくるのを待
っていた。

ある夏の日のこと。急に空が暗くなり、バラバラバ
ラ……と大つぶの雨が降ってきた。

しのの家の軒先に、雨やどりのした男がいた。立派な
身なりの若いお侍さんや。なかなかやみそうにない
空を、じいっと見ておった。しのお母が、気のどく

に思って傘を貸してやった。

二、三日して、若侍は、傘を返しにやってきた。そ
こで、しのと出会ったのや。ひと目でしのに心をつば
われた若侍は、毎日のように、家にやってきた。

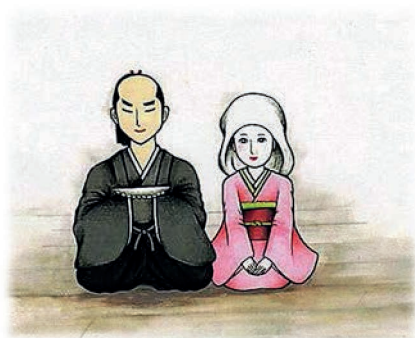
やがて、若侍は言った。

「しのさんをわたしの嫁にむかえたい。」

それを聞いて、お父もお母もよろこんだ。身分の高
いお侍の嫁さんになれるんや。これほごい話はない
やろう。お父とお母は、二つ返事で承知した。

早速、祝言（結婚式）や。

晴れ着を身につけたしの
は、それはそれは美しかっ
た。祝言を終えると若侍は、
お父に言った。



「今までわたしは、だれのカも借りずにやってきました。

しのさんを屋敷まで連れていくのもわたしひとりで
すませたい。」

その言葉を聞いて、お父はがっかりした。お母とふたりで、しのお屋敷まで送って行くことしたからな。けれど、すぐに、お侍の家には、何か特別なきまりがあるのやろうと思いなおして、

「それはごもっとも。」
と、返事した。

お母は、この日のために用意しておいた、赤い鼻緒の真新しいげたを出してやった。しのは、そのげたをはき、若侍に手を引かれ、生まれ育った家を出た。お父とお母は、いつまでもいつまでも見送っていた。

それから何日もたったけど、しのから、何のたよりもなかったんや。お父とお母は、

「しのは、どうしているのやろう。」

と、心配になってきた。

ある日のこと。ひとりの村人が、神於山へたきぎをとりに行った。奥へ奥へと入って行って、気がつくと、神於権現の社のそばまできていた。あたりを見まわすと、木々に囲まれた社殿の下に、げたが一足ころがっていた。赤い鼻緒の新しいげたや。

「だれのんやろ。」

と、そのげたをたきぎの上に乗せて、山を下りはじめた。途中で、背中のげたが、ゴトゴト動いたような気がしたそうやが、無事に家に帰りついた。

この話は、すぐに村中に広まった。村人が大勢集まってきてげたを見ていたところへ、お父とお母がとびこんできて、げたを見るなり、

「ああつ。しのー、しのげたや。しのー、しのー。」
と、悲痛な叫び声をあげた。

「なんで、げただけが、あないなところにあったんや。
しの、お前はどこにいるのや。」

と、お母はげたをぎゅっと抱きしめた。胸のところで、
げたがコトツと動いた。

「しの、何ぞわてらに伝えたいことがあるんか。」
げたがまた、コトツと動いた。

すぐに、お父とお母は近くの占い師をたずねた。

占い師の言うのには、

「神於の権現さまの使者である大蛇が、若侍に姿を変
えては村へ現れていたんやなあ。しのさんは、その
大蛇に見込まれて、連れていかれてしもたんや。」
お父もお母も息をのんだ。

「ほんなら、しのは蛇の嫁さんになってもたんか。」
抱きしめたげたが、コトリと悲しい音をたてた。

「ああっ……」

あまりのことに、ふたりは、どっと泣きくずれた。

それからというもの、ふたりは毎日、毎日、神於山
に登っていった。

権現さまの社のあたりをふらふらと歩きまわり、

「しのを返せえ、しのを返せえ。しのー、しのー。」
と、声を限りに、呼び続けた。

けれど、いくら呼んでも、しのの姿も返ってくる声
もなかったそうな。

ただ、木々をわたる山鳥の羽音だけが、聞こえてい
たということや。

むかしむかし、

ずーっと昔の話や。

